

令和2年度第2回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

令和3年2月22日(月) 16時00分 ~ 17時00分

岐阜県庁舎 4階特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 安福 正寿

委員 稲本 正

委員 野原 正美

委員 竹中 裕紀

委員 近藤 恵里

3 関係者

大垣桜高等学校 服飾デザイン科3年 池田 琴葉

食物科3年 金谷 桃奈

生活文化科2年 西野 蓮菜

福祉科3年 村田 姫菜

岐阜大学 教育学部教授 益子 典文

4 オブザーバー

副知事 河合 孝憲

清流の国推進部長 尾鼻 智

副教育長 内木 禎

5 陪席

教育次長 堀 貴雄

清流の国づくり政策課長 後藤 勝

教育総務課長 松本 順志

6 議事録

別紙のとおり

議 事 録

発 言 者	発 言 内 容
清流の国 推進部長	<p>ただいまから岐阜県総合教育会議を開催する。</p> <p>議題に入る前に、机上の花を紹介する。県と県内の花き関係者は、現在花きのPRと活用促進のために、会議や知事の記者会見などで、花を飾っている。本日の会議でも、県産の薔薇や本巣市内で生産されたガーベラを中心とした花飾りを行った。</p> <p>さて、本日は、「1人1台端末整備後の学校教育について」を議題とする。</p> <p>手元にあるタブレットだが、今年度、県立高校の生徒に1人1台端末として整備した機種。本日の会議では眼前のモニターと、この端末を使用する。説明中の資料をモニターに表示し、説明資料で気になるページがある場合は、端末に同様の資料が入っているので、適宜操作いただきたい。</p> <p>それでは早速、普通科高校でICT活用に積極的に取り組む、岐阜高校の紹介VTRをご覧ください。</p> <p><動画視聴></p> <p>続いて、専門科高校で特色あるICT活用に取り組む、大垣桜高校から、オンラインにて事例発表をお願いします。</p>
大 垣 桜 高 校	<p>大垣桜高校の各学科でのICTを活用した取り組みについて発表する。</p> <p><服飾デザイン科の発表></p> <p>服飾デザイン科では、以前から、iPadを使用した授業があったが、1人1台のタブレットが整備されたことで、さらに授業で活用することが増えた。</p> <p>(画面の資料を示し)左側はファッション造形の授業。20人ずつの分割授業だが、A教室で先生が授業している内容を、B教室でもプロジェクターで投影し、同じ授業を視聴することができる。</p> <p>(画面の資料を示し)右側は、先生が学習内容を説明された後、もう一度確認し</p>

たい箇所をコンテンツで再確認し、製図や製作を行う様子。わからないところは、先生に聞いたほうが早いかもしれないが、コンテンツでもう一度確認することで、自分で理解できたと実感できる。また、放課後にコンクール製作に取り組むときに、コンテンツを参考にすると作業が進む。

（画面の資料を示し）こちらは、科目「課題研究」における取り組み。

私たちが暮らすこの尾州産地は、ファッション産業文化を継承したクオリティの高い日本のものづくりが注目されている。

岐阜県繊維協会の協力のもと、生地製造企業との連携を深めている。

例年は、企業見学をして、企業とオリジナルテキスタイルについて検討を深めて、作成していくが、今年度はコロナのため、事前に質問する内容を考え、リモート会議を重ね、テキスタイルを考案することができた。

私たちが作りたい形、色、素材感など、直接映像を見ながら交渉できたので、納得いく作品を作り上げることができた。

<食物科の発表>

食物科では、1人1台のタブレットを用いたことにより、さまざまな授業を展開することができた。

（画面の資料を示し）こちらは、課題研究で、卒業研究作品発表会に向けて、展示作品の調理工程をタブレットで撮影し、動画にまとめた。また、発表原稿は、タブレットに入力してステージ発表を行った。料理のおいしさは、味や香りはもちろん、調理する音や食材一つひとつの形や色も大きく影響する。タブレットでそれらを表現することができた。

（画面の資料を示し）こちらは、調理理論の学習の様子。3年生で大量調理の食品衛生や給食管理の学習のため、20人で120食分の調理をする「レストラン実習」を行う。テーマに沿って、個々に考えた料理レシピをタブレットに入力し、グループで共有してまとめた。調理工程を一斉に多数の目で確認することにより、改良に向けた意見交流もしやすくなった。今後は、作業動線表や料理の温度管理をシステム化し、より効率的に安心・安全に調理をすることができる力を身に付けていきたい。

<生活文化科の発表>

生活文化科では、科目「子どもの発達と保育」で、中津川市にある坂下高校と9月～12月に、5回の遠隔授業を行った。WEB会議室を2回線利用し、1つはお互いのクラスの様子が映るように設定し、もう1つは、先生の講義や生徒の発表、外部から子育て支援センターの方の話などを配信する形で交流した。初めてのタブレットを使った交流活動だったが、坂下高校の授業の様子や反応がよくわかり、離れた学校との交流活動を楽しむことができた。

3回目からは、坂下高校2人と大垣桜高校4人の計6人グループを作り、交流した。「発達に合わせた服装」というテーマでは、子どもの発達段階に合わせた服装を描いてお互いに発表した。「児童文化財づくり」では身に付けさせたい力をテーマにそれぞれが身近な廃材でおもちゃ作りを工夫し、発表した。そんな視点もあったのかという発見やこんな工夫をすると益々遊びやすくなるなどという意見が出て、活発な交流ができた。

また、教室での授業ではMe t a M o j i ソフトを利用して「布おむつと紙おむつ」や「母乳と調製粉乳」のテーマで意見交流した。タブレットを活用することで、先生がランダムに組んだメンバーが、席の移動や対面することなく、互いの意見を伝え合うことができた。個々がタブレットに記述することで、声を発することなく、意見を正確に伝えあうことができ、短時間で多くの意見を知ることにより、深く考えることができた。

<福祉科の発表>

福祉科では、科目「生活支援技術」の授業で、タブレットを活用している。常に介護技術の見本をタブレットで個々に画面で確認でき、一人ひとりが確実に介護技術の習得ができるようになった。

また自分たちの実技を撮影して、振り返りができるようになったため、自分の課題が明確になった。自分はできていると思っていた介護が、実際は腰が高いとか、重心の位置が悪いなど、客観的に分析でき、復習にもとても有効だと感じている。

また、コロナのため、楽しみにしていた介護実習が施設でできないという状況になった。介護の仕事は人と人とが直接関わりあってこそ成り立つが、オンラインで施設と教室をつなぎ介護現場の現状を学んだ。リアルタイムで活発に質問すること

	<p>ができた。</p> <p>実際の実習は1人1施設だが、1つの施設の状況をクラス全員で確認し、交流できたため、情報を共有しあうことができた。施設の職員の方の忙しい中での対応と、入所利用者の方の承諾があって実現できたことにととても感謝している。</p> <p>最後に、今年度のICTを活用して良かったことと、今後取り組みたいことをまとめた。</p> <p>服飾デザイン科では、基礎的な実技内容を視覚で伝わるようにしたことで、私たち生徒が簡単に復習できるようになった。今後はさらに学年を超えた学習効果が期待できる動画があると、発展的な学習ができるようになると思う。</p> <p>食物科では、映像を編集する力が身に付き、プレゼンテーション力がついた。今後はさらに献立作成や調理計画のデータ化、調理環境のシステム化ができるようになると、より管理しやすくなると思う。</p> <p>生活文化科では遠隔授業の交流を通して、他校と一緒に授業ができ、学びが深まった。今後の多世代との地域交流に活用できる方法を考察でき、来年度の課題研究が楽しみになった。</p> <p>福祉科では介護実技を撮影することにより、課題が明確となり、理解が深まった。今後は、オンラインでさらに地域の施設や高齢者の方々との交流を深めたいと思う。</p> <p>以上で発表を終了する。</p>
意見交換（オンライン）	
稲本委員	具体的に服飾サンプルなど、何かデザインしたものをこの場で、画面越しで見せてもらえるか。
大垣桜 高校	申し訳ないが、本日は用意していない。
近藤委員	生活文化科の発表で、遠く離れた坂下高校と実際に交流してみて、同じことを学ぶ生徒との相違点や同一だなと感じた点を教えてもらえるか。

大垣桜 高 校	<p>大垣市は、子育てについて大変手厚く支援していることが子育て支援センターの方の話を聞いて分かった。また、坂下高校は、地域の雰囲気なのか、のんびりしている感じが伝わってきて、そこが違いだと感じた。</p>
清流の国 推進部長	<p>以上で県内高校の発表を終わらせていただく。本日はお忙しい中ありがとうございました。</p> <p>続いて、岐阜大学教育学部の益子教授から、学習者用端末活用による探究的・教科横断的な学びの推進について、発表いただく。益子教授お願いいたします。</p>
益子教授	<p>学習者用端末は、今、大垣桜高校に発表いただいたように、多様な場面で活用できる。</p> <p>一方、学習者用端末を学校で利用することによって、どのような学力の向上が想定できるか考えておくということも、重要である。</p> <p>それは、学習者用の端末を利用すること自体が目的化することを防ぐとともに、教師がよりよい活動を設計することを可能にするからである。</p> <p>そこで今回の話題提供では、例えば、ふるさと教育のような探究的な活動、先ほどの岐阜高校のSDGsのような、単一の教科ではなく多様な複数の教科の力を合わせて学びを展開する際に、学習者用端末を利用することによって、どのような学力向上を想定できるかについて、課題提起をさせていただこうと思う。</p> <p>今、冒頭で学力と申し上げたが、平成 29、30 年告示の学習指導要領では、資質・能力という言葉が非常に多く用いられている。</p> <p>この用語は、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」での審議の結果を踏まえたものになっているが、従来の学力という用語は何かを知っていることのイメージが強いことから、学習の基盤であるとか、先ほどのような現代的な諸課題に対応して求められるもの、これを資質・能力と呼んでいる。例えば、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力。これらを、従来の学力に対して資質・能力と呼び、これらを育成することが学習指導要領に位置付けられているということである。</p> <p>そこで、教科横断的な学習の充実が、今回の学習指導要領では重視されていると考えられる。</p>

しかし、具体的に検討すると、学力調査という用語はあるが、資質・能力調査という用語は、私も聞いたことがない。

そこで、今回の報告では、教科縦割りではなく、探究的な学び、教科横断的な学びにおいて育成される学力、これを資質・能力と呼ばせていただこうと思う。

学習者用端末を探究的・教科横断的に利用することによってどのような資質・能力が、育成されると想定できるか、具体的な学力調査問題から考えてみる。

まず、平成 31 年度の全国学力・学習状況調査、算数の大問 1 設問 3 の問題から考えてみる。

（画面の資料を示し）この設問は、友達が図形の面積を求めるために立てた式を読み解いて、その意味を説明するもので、実際の授業においても頻繁にあり得る場面が想定されている。

この下線部の 20 マイナス 4 とはどのようなことを表していますかと、問うている。

左側に、解答類型というものが並んでいるが、実際に全国の小学校 6 年生はどう答えたかというデータである。

二重丸がついているのが正答になるが、この正答の条件は、①②③すべてを書いていないと正解にならない。

20 が長方形の面積を表している。4 が三角形の面積を表している。それから、20 マイナス 4 なので、減法、ある数量からある数量を取り去ることを表している。正答例がその下にあり、「長方形の面積から三角形の面積を引いていることを表している」とまで書かないといけない。

ところが、正答は 44.1%にとどまる。表現が不十分な回答、すなわち正答の条件の一部のみ満たしている回答の割合が、類型 2 から類型 7 まで合わせると全体で 36.2%に上るといなのが、顕著な傾向になっている。

これら表現不十分な回答の児童は、設問の意味や回答すべき内容は、一定水準まで理解しているから、回答できるわけだが、文章による十分な説明ができていないという判断になる。

事実や理由や方法、これを文章に記述する設問の回答が、正答の条件の一部にとどまる傾向は、平成 19 年度の第 1 回全国学力・学習状況調査の結果から続いており、学習

者が、自身の考え方や理由を十分に文章表現できる水準で、資質・能力としての言語能力を育成する必要があると思う。

もう1つ、具体的な事例を挙げたい。

(画面の資料を示し) これはPISA (OECD生徒の学習到達度調査) 2018、結果は2019年に報告されたが、読解力を調査するために使われた問題例である。

PISAはOECDが中心となって、義務教育終了段階の各国の生きる力を測定することを目的としていて、日本は、高校1年生が参加している。

読解力の定義は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと」となっている。

右の方に、①②③とあるが、ただ単に内容を理解するだけではなくて、情報を探したり、書いてある内容を評価して熟考したりする。場合によっては矛盾を見つけて対処するというアウトプットも含んで、読解力と定義されている。

この問題は、コンピューターを利用した読解問題のサンプルということで唯一公開されているものである。

ある大学教授のブログがあり、例えば、「教授がフィールドワークを始めたのはいつか」を読み取る。問題にはリンクが2つあり、教授が貼った書評のリンクと、後から投稿した人の、「イースター島での体験記に検討すべき説がある」というリンクが貼ってある。このリンク先に書いてある内容は、事実と意見のどちらかというのを判定させたり、それからサイエンスニュース、「森が破壊された原因はネズミか」という記事も読んだ上で、3つの資料を読んで、この大木が消滅した経緯は何だと思うかを自由記述で回答する問題である。

つまり、テキストを理解するだけではなく、自分の意見を、電子テキストから形成することも、読解力の一部になっている。

この問題で非常に面白いのは、解答例。採点基準に正解例が載っているが、実際に巨木に何が起こったかについてはこの3つの資料を読んでも、さらに研究を進めるべきだというような回答を正解としてカウントしている。これは、読解力の特徴を表していると思う。

こういうサンプルを見てみると、1人1台の学習端末が整備され、今後ふるさと教育など探究的な学び、各教科において、学んだことを教科横断的に活用する際に学習端末を活用することによって、今の2つの事例で述べたような、情報を探し出すとか理解、解釈するとか、評価し熟考する。そして自分の考えをきちんと十分に説明する。こういう資質・能力というのが、格段に向上するのではないかと、大いに期待している。

ちなみに、PISA2018の調査では、学校以外の場所でデジタル機器をどれぐらい利用していますかというアンケートがあり、「1人用ゲームで遊ぶか」という問に対する「毎日」か「ほぼ毎日遊ぶ」という回答の割合が、日本はOECDの国の中でトップだった。

一方、「学校の勉強のために、インターネット上のサイトを見る」という割合が、「毎日」か「ほぼ毎日」の回答割合はOECDの国の中で日本が一番下という結果である。

これには様々な理由があり、家庭で自由に自分が使えるPCは、日本の高校生は非常に少ないという分析もあることから、子供が学校で端末を1台ずつ使うことにより、この状況も改善され、今話したような資質・能力は、格段に伸びてくれるのではないかと期待している。

次に、学習者用端末を利用した授業例から、教師が学習者用端末を、どのように授業の中で位置付け利用しようとしているのかを考えてみる。

ここで紹介する実践は、平成27年度に、熊本県教育委員会の未来の学校創造プロジェクト校の1つだった、^{うぶやま}産山村立産山小中学校、これは阿蘇山の北のほうにある小さな小中学校で、現在は産山学園という義務教育学校になっているが、ここの発表会に講師として呼んでいただいた際の事例を3つほど紹介させていただく。

(画面の資料を示し) 中学校数学の授業の冒頭の場面だが、提示されている問題は、図の中に、自分の家から県道と国道までは同じ距離、3つの駅のうちB駅とC駅までの距離が同じという条件で、作図の方法を適用して、自分の家がどこにあるかを見つけるという問題。

丸がついているABCDというのは、その作図の対象とする図が4つ掲載されている。一見すると非常に無駄のように思えるが、この教師が必要と判断したためこの4つをそれぞれ提示したと考えられる。

なぜこの教師はこの4つを、わざわざ準備して授業で使ったか、それはどのような意

図であったか。

この授業がどういう授業だったかを見ていくと、課題を提示した後に、全然わからない子は前の方においでと呼んでいて、問題解決のヒントカードを端末に配った後に、コンパスや分度器を画面上で利用して個別に探究活動を行い、試行錯誤を自由にパソコンの中で行わせている。その過程で、友達との意見交換も、画面を見せ合いながらやっている。

最も興味深いのは、このような探究活動をした後に、最良の説明を書く課題は、手書きでワークシートに書いている点である。

つまり分度器やコンパスの利用方法には習熟しているということを前提として、友人との合意を含む個別の探究活動は学習者用端末で自由に行うが、考えをまとめて表現する活動は、従来型の紙のメディアに文章で書き、それをファイリングするという活動を残しているというところが一つの特徴だと思う。

これは先ほどの説明が十分にできていない子供が多いということとも関連する活動と考えられる。

また、最初に黒板に大きい図が貼ってあったが、常に全員が初期状態を、参照できる状態にしておく必要性を感じたのではないかと私は思う。

もう1つ、次は中学校体育のマット運動の事例。

生徒が主体的に自分のパフォーマンスを自己批評する活動である。

自分で自分のパフォーマンスを観察するために、体育館で主体的活動を行うための様々な掲示物を提供した後に、タブレット端末を使って、ペアを作り、その場で友達のコンテンツを作成する。そしてそれをすぐ見て、自己批評したり友達から意見をもらったりする。

その結果、ワークシートに、ペアからのアドバイスとできたことや気づきを議論しながら文章で残し、最後にペアで分かったことをコンテンツをもとに発表するという活動を授業で行っている。

最後に、小学校社会科の事例。

この授業では、冒頭で学習者用端末を家庭に持ち帰って、持ち寄るところから授業が

始まっている。

家庭でゴミを減らす工夫を調べてきており、その発表が導入部分となっている。

いわゆる宿題を持ち帰る授業ではなく、家庭での事例を持ち寄ったところから授業が始まるということは、興味深い取り組みだと思う。

次に、持ち寄った資料や、これまで集めた資料をもとに、70年前、40年前、今と、人口が増えているのに何でゴミの量は減っているのかという課題を提供している。いろいろな資料をもとに話し合うが、ホワイトボードにやはり手書きで書いて、まとめている。発表もホワイトボードを使って、最後に先生がまとめた内容をノートに書いている。

3つの事例を紹介したが、教師が学習者用端末によって、どのような活動を強化していけばいいかという点は、教師は暗黙的に考えていると思う。児童生徒の学習活動を整理して、今回の授業を設計したものと考えられる。

学習者用端末で強化されていたのは、探究活動であった。先ほど発表した大垣桜高校も、探究活動が十分にできたと言っていたが、学校外での活用を含む部分を強化していて、その活動の成果を従来型のメディアであるワークシートやホワイトボードを利用しながら、説明や制作活動を行っている。

学習者用の端末内にコンテンツもあり、加工したりすることもできる。しかし、常に蓄積して利用することを前提にしているというよりは、探究過程の強化のために利用されている。

思考力・表現力を向上させるための「残すメディア」とは、差別化しているということも教師の教育技術の非常に興味深いところだと思う。

資質・能力を向上させるためにどのような学習活動をデジタル機器で強化するか、それから、何を残せばいいか、この見極めが非常に重要と思う。

最後に、学習者用の端末を1人1台導入することによる、探究的な学び、教科横断的な学びでは、全国学力・学習状況調査で求められている十分な説明力、PISAで求められている読解力、これはただ読み取るだけでなく、自分の考えを表出化するというのも含んだ読解力だが、このような資質・能力を向上させることを意図した利活用というのがこれから求められるのではないかと期待している。

	<p>そしてその利活用を実現するためには、教師が持っている経験知としての授業設計技術を強化する視点が重要である。新たに何か学ぶというよりは、今までの授業設計技術を変容させたり強化させたりしていくという視点が重要と考える。</p> <p>今後、教師のICT活用技術を普及するための研修内容や、そのための仕組みが導入されると思う。</p> <p>利用方法は確かに重要だが、それに加え、特に探究的な学び、教科横断的な学びにおいて、児童生徒のどのような資質・能力の向上を目指そうとしているのか。そしてそのような資質・能力の向上を図るにあたって、教授学習過程の設計技術では、どのようなことに留意していくことが重要かについても、加えて普及を図っていただければ、教師の持つ能力が十分に発揮できるようになるのではないかと考えている。</p> <p>以上で報告を終了する。ありがとうございました。</p>
意見交換	
竹中委員	<p>端末を使うことによって教育の質はどんどん上がると思う。</p> <p>高校生が進みたい方向、やりたいことへの階段を上がっていく際に、例えば大学入試のあり方が、資質や能力、今まで勉強してきたことがきちっと次のステップに繋がってくるかというところは難しいと思うが、その辺りの整合がとれないと、学校だけに任せておいては大変なことになるのではと思うのだが、その辺りはどう整合されるのか。</p>
益子教授	<p>個人的な意見でよろしいか。</p> <p>いわゆる前期・後期日程入試と、推薦入試というものがあるが、推薦入試の部分では、今言われたような資質・能力を重視したものに少しずつ変わっていくのではないか。</p> <p>それから、高校時代に蓄積した経験はどういうものか、ということを経験が評価する方向に少しずつ変わっていくのではないかと考えている。</p> <p>それから、今回の大学入学共通テストでは、問題の傾向が変わったと話題になったが、問題自体を見直すという側面もある。これは大学入試だけが変わればいいと</p>

	<p>いう話ではなく、高校の教育も併せて、それから入った後の大学教育も併せて変わっていかねばいけないものだと思う。少しずつだが改善の方向に行くのではないかと思っている。</p>
稲本委員	<p>今までの教育は資質・能力ではなく、どれだけ覚えたか。益子教授が言われるように、今後は資質・能力をちゃんと見なければいけない。残念ながら、今の教育現場は資質・能力主義ではなく、どれだけ覚えているかを見ている。古典力学を教えて、スマホの原理に使われている量子力学は教えていない。学校の先生の意識を、資質・能力かつ、横断的な探究の方に向ける、そういう施策を考える必要がある。これについて、何かアイデアはあるか。</p>
益子教授	<p>今回の1人1台端末の導入はドラスティックな変化だと思うが、学校の先生は、小規模なイノベーションは毎年経験している。子どもの家庭の変化や、進学校から非進学校に異動するなど、その度に知識を組み替えて対応している。</p> <p>新しいイノベーションに対応するときに、それをすべて組み替えるのではなく、蓄積した技術が活用できるような形で、イノベーションへの対応を考えるということが、非常に重要なことかと思っている。</p> <p>変わるべきものがあるとしたら、これまでの蓄積をいかに変容させていくかサポートするというのが、うまくいくコツかなと個人的には思っている。</p>
稲本委員	<p>もう1点は、先生たちが教わってきた技術や知識が、一部はもう使いものにならないということを理解すべきだと思う。</p> <p>要するに、今の子どもで優秀な子は、岐阜県にいながら全国にも早くから繋がっているだろうし、岐阜のバスケット部の子が、アフリカから来ているなんて事例もあるわけで、時代の方が先に進んでいると感じている。</p> <p>それに対し、先生たちが、正直言ってついてこれていない、過去に執着しすぎた部分があるのではないかと感じている。今の環境問題とかコロナの対応も含めて、人類の課題を乗り越えるためには、今までのノウハウだけでは駄目だと思う。</p> <p>過去のノウハウが使えるものもあるが、使えないものもあるということを押さえておく必要がある。</p>

野原委員	<p>1人1台タブレットを持つことによって、全員が授業に取り組んでいかなければならないシチュエーションができてきたと思う。これにより、皆が自分の意見を持ち、皆が自分の言葉を先生に発するとか、皆さんに発するというような、一人ひとりに寄り添える教育が深まっていく、凄く良いチャンスとなることが期待できるのではと思う。</p> <p>今、稲本委員も言われたように、それを仕組んでいく教師側の力量が問われていくのではないかと考えている。</p> <p>実際、今、教育学部で学んで教員になっていただける若い方たちは、ICT機器を扱う能力としては、高いものがあると思うが、一人ひとりの子供たちの多様な意見を吸収して、またそれを評価していかなければいけないという能力もこれから学んでいかななくてはならず、より先生も大変になると感じている。</p> <p>子供にとっては、端末の導入により、否が応でも自分は考えなければいけないという仕組みがどんどんこれから入ってくる。一人ひとりに寄り添って伸ばしていく、そういったアイテムとしては本当に大きな期待が持てるかなということを感じた。</p>
益子教授	<p>将来先生になる学生にとっても、いきなり教える技術を学ぶというよりは、自分が学ぶ経験がまず重要ではないかと考えている。</p> <p>先程の高校生のように、高校時代に多様な探究経験を積んで大学に入ってきてくれる学生が、これからどんどん増えてくると思う。そうすると大学教育も変わらなくてはいけなくなる。入ってきた新1年生にどのような情報教育をしていけばいいのかという部分が、最初が変わってくると思う。</p> <p>だが、過渡期である今は、今の高校生のような経験ができるよう、大学生にも十分に機会を提供する必要があると思う。</p> <p>その上で、そういう経験を、自分が将来教壇に立ったときに、子供たちに同様の経験を提供するには、と考えることができると思う。そのため、まずは教える技術を学ぶ前段階の経験を、いかに積ませるかという段階かと考えている。</p>
知 事	<p>資質・能力ということでご紹介いただいたが、まさに短期的・長期的に見たときの公平な評価をどうするかという問題がある。資質・能力というのはどういう形で、</p>

	<p>定性的に、定量的に評価するのか。評価方法を併せて開発していかななくてはならないと思う。</p> <p>それから、そうはいつでも、学力として、知らなきゃいけないこと、覚えなきゃいけないことが山ほどあり、それを理解するのも大変な作業。この学力と探究的・教科横断的学びをどう組み合わせるかということが問われていると思うが、現時点ではどういう段階にあると思われるか。</p>
益子教授	<p>今回の大学入試の改革が、高大接続改革実行プランとして浮上した時に、そのまとめ役だった方の講演を聞きに行ったが、やはり大学入試を考えると、知識、技能と思考力・判断力・表現力と学びに向かう態度を評価すると話していた。</p> <p>知識・技能のところは、今、知事がおっしゃったように、軽視していいのかという疑問の声はあったが、学力の3要素を考えると、知識・技能が重要なのは当然ということだった。それに加えて、思考力・判断力・表現力や、協働性や主体性というものを伸ばして欲しい、という考え方だろうと思っている。</p> <p>それから評価は、非常に難しいと言わざるを得ない。</p> <p>資質・能力というものが、例えば10時間の学習が終わった時点で評価できるかということ、これはかなり難しい。長期にわたって、先ほどのSDGsの探究的な学習のように、1ヶ月2ヶ月、或いはそれ以上の期間、自分で主体的に探究していく過程で身につくものだと思う。</p> <p>そのプロセスと成果をどう評価するかというのは、具体的にこれが良い方法というものは、今のところ明確なものがあるとは言えないのが現状だろう。</p> <p>ただ、短期間の教育の成果を求めるのではなく、長期間の様々な試行錯誤を含む活動を通して身につけるものを重視していこうという方向に、少しモードが変わってきたのではないかと思っている。</p>
稲本委員	<p>資質・能力を図るのはとても難しい。例えばノーベル賞を取った人の人生を調べると、資質・能力を高めるための努力をこのようにしていたとかが、結果が出てからわかるようになる。しかし、このタイプのことをやれば絶対に資質・能力が上がるかということ、まだよくわからないというのが、現段階だと思う。</p> <p>今、益子教授が言われたように、ある程度の常識や知識がない限りは、物事を判</p>

	<p>断できない。</p> <p>ただ、今の日本は、総合大学が総合大学化していない。幅広い意味での探究と、1つのことを深く掘り下げること、両方のバランスが大事だと思うが、日本は両方が、世界と比べると遅れていると感じている。</p> <p>日本は中間的に、上手く収める人材を作る課程になっており、今までは成功していた。戦後経済はそれで成功したが、今からはそういう時代ではないという認識を、教育界は持たなければいけない時代に来ているのではと感じている。</p> <p>学校の先生がその必要性を本当に納得しているかどうか。今までの積み上げ式の護送船団方式だけでは乗り越えられないということを、理解してもらいたいと思う。</p>
竹中委員	<p>去年に端末の導入を予算化して、すぐ実行して、本日いろいろな事例を出していただいた。本日報告された事例では、上手く使っていただいているが、これは今後、タブレットを好きなように使ってしまい暴走する位の状況になるのではと感じていた。しかし、益子教授が、資質や能力を身に付けることが重要と、歯止めをかけながらICTを活用した学びを行う必要があるという話をいただき、非常にいいスタートを切れていると思う。</p> <p>議論があったように、入試がどう変わっていくかというところは否も応もなく意識するところ。大学はそこを踏まえてきちっと方針を出してほしいと思う。</p> <p>教育の質の向上という点では、教員の働き方。教育予算の9割が人件費にあたる。教員の質を格段に上げるには、教員の待遇も格段に良くしなければいけない。今のままでは予算も増えないし教員も大変なので、その配分をよく考えなければならない。そういうトータルのICTの活用も、このままなら一気に進めてもらえると思うので、そういう骨格部分も進めてもらいたいと思う。</p>
稲本委員	<p>今日の2つの学校の発表はとても良かった。モデルとか具体例があると真似てまた新しいことを進めることができる。知事が端末を頑張って配備しても「全然使われませんでした。」ではいけない。こういう使われ方をしたという具体例を基にさらに進めていくことで、もつともつと広まっていくと思う。具体的な事例を上手くまとめられており、短い時間だったが本日は良い会議だったと思う。</p>

<p>教 育 長</p>	<p>今日、様々なご意見をいただき、ICTを教育課題の解決に、うまく活用することが必要であると感じた。</p> <p>ICTは、人と人をつなぐコミュニケーションのツールとしては非常に優れているのではないかと。ICTを使って人と人とが交流することにより、新しい知識や知見が生まれる、素晴らしいツールではないかと思う。</p> <p>今後は、実践的に使っていくために、教員や生徒が使い方を覚えた上で、教員に授業の中で活かしていくところまで高めていってもらえることが、課題になってくると思う。</p> <p>来年度の予算でもこの部分を重視して取り組んでいるので、来年の今頃は、もっとハイレベルな授業が展開できることを期待したい。</p>
<p>知 事</p>	<p>コロナ禍の故に、デジタル化が急速に進んでいる面もあり、積極的に、教育を含め多様な分野でオンライン化を進めている。教育現場にタブレット端末を整備して、まだ時間が経っていない中で、本日の話が聞けたのは非常に良かったと思う。</p> <p>今後ドラスティックに変わっていける部分が相当あるかと。この延長線上で、いろいろまた議論していきたいと思う。</p> <p>どうもありがとうございました。</p>
<p>清流の国 推進部長</p>	<p>それではこれにて、岐阜県総合教育会議を終了させていただく。</p> <p>本日はどうもありがとうございました。</p>